

## 第 81 回 歴史リレー講座「南都の社寺から学ぶ『親孝行ノススメ』 岡本 彰夫氏 (R3.6.20)

法隆寺や東大寺の正月法会では、必ず親孝行に関する文言が唱えられます。私はかつて父母の役割を考察した際に、その語源を調べたことがあります。父母ともに諸説あり、父は子（霊＝威厳ある尊いもの）が重なったもの、母はハシ（愛らしい、優しい）が重なってやがてハハになったという説が有力だと知りました。また、四恩（父母、社会、国家、三宝）を大切にせよという仏教的思想も役立ちました。ちなみに、言葉の研究は仏教や儒教が導入される前の時代ものとして、江戸時代の国学者である本居宣長らが牽引しました。例えば、穢れるの本来の意味は「生命力が衰える」で、ケ（気）ガレル（枯れる）ことです。

さて、『往生要集』第一等活地獄の事によれば、親を殺した者は八大地獄中、最も苛烈な無間地獄に堕ちます。「三つ子の魂百まで」とはよく言ったもので、親殺し、子殺しが後を絶たない現代社会において家庭教育の大切さがひしひしと感じられます。冒頭で申し上げたように、法隆寺や東大寺の正月の修正会莊嚴文しゅうじょうえしやうごんもんには「乳房の報ひ」という文言があります。これは、天下泰平や五穀豊穰などを願うことによって、自身が母から受けた恩を返すという意味です。この莊嚴文を理解するには、父母への十の恩を説いた「父母恩重經」ふちおんじゆうを読む必要があります。なかでも印象深い章が「臨生受苦の恩」りんしょうじゆく（月満ち時到れば、業風催促して、徧身疼痛し、骨節解體して、神心惱亂し、忽然として身を亡ぼす）と、「究竟憐愍の恩」くきやうれんみん（己れ生ある間は、子の身に代らんことを念ひ、己れ死に去りて後には、子の身を護らんことを願う）でしょうか。

命を繋ぐため、身を割く痛みにも耐え命懸けで子を産む母の苦しみはいかばかりでしょう。産声を聞いてからは常に子の身の安寧を願い、必要とあらば自身が悪業に染まることも厭わない。その身が尽きても、我が子に対する憐憫の情が尽きることはありません。同経は最後に「父母の恩重きこと天の極まり無きが如し」と結んでいます。だから先祖の供養（弔うこと）や廻向を蔑ろにしてはいけません。供養とは父母から受け継いだ恩を次代に語り継いでいくこと、廻向とは、自分の積んだ徳を他者へ差し回すことです。

「父母恩重經」は千年前に書かれたとはいえ、現代人の私たちにとって実に身につまされる内容です。人生のすべてを費やして育てた子も妻を娶ったとたん父母を顧みず、家族で会いに来ることもなくなる。老親もいずれは片方が先に逝く。残され語らうことも叶わぬ者の侘しさたるや、見知らぬ土地で独り過ごすようなもの。このような親不孝者は必ず地獄に堕ち、いかなる仏も度し難いというわけです。

最後に、『春日権現験記』（鎌倉時代の絵巻物）第六巻を紹介しておきます。興福寺の舞人を務める、狛行光こまのゆきみつは日ごろから秘かに春日様に賀殿の曲を奉納していました。あるとき死に臨んだ際、陰徳のおかげで春日大明神に助けられ、ついでに地獄を覗いてみないかと誘われます。目も覆うばかりの凄惨な光景に身を縮ませる行光に大明神は「最上の功德は父母への孝養だ。これを十分に務めるならば、この報いを免れることができる」と諭します。その後、息を吹き返した行光は、この体験を語り広めたということです。

私たちは歴史から得られた智慧をどう現代に生かすべきでしょうか。頭で考えるよりも芝居、浄瑠璃、浪花節を通して情や義理の歴史に触れることです。江戸時代の郡山藩主柳沢信鴻のぶとぎの日記には、以前仕えていた女中が幼子と共に訪ねて来たときの情景が描かれています。夕刻、帰途につく親子の情景は、何とも言えぬ人間の情愛を感じさせます。歴史は無機物的な側面のみで語るべきではありません。商売のやり方にしても、昭和 40 年代を境に大きく変化しました。自社さえ潤えば、社会道徳は関係ないのでしょうか。いくら世の中が便利になろうと、私たちは理想にあふれた情の歴史を手放してはいけません。

奈良在住の方は却って実感が薄いかもしれませんが、ここ奈良という地は春日祭、東大寺修二会などの法会、伝承、芸能、祭礼などの古代歴史文化が断絶することなく続く奇跡の場所、生きた歴史の宝庫です。これが京都との決定的な違いです。みなさまはこの有難みを当然と思わず、伝承や父母から受け継いだ恩を次代に繋いで下さい。そして、奈良こそが今後の日本の模範になるべき土地だということを心に留めて下さい。